

第34期第2回小田原市図書館協議会 会議録

日 時：令和3年2月16日（火） 午後2時00分から午後4時15分まで

場 所：小田原駅東口図書館ほか

1 あいさつ

文化部・石川部長

2 報告事項

（1）調べる学習コンクールの審査結果について【資料1】

（2）令和3年度事業及び予算の概要【資料2】

○事務局説明(説明省略)

○質疑応答

大塚副委員長：令和3年度小田原市公共用地先行取得事業特別会計歳出予算の償還金とは、どういうものか説明をいただきたい。

古矢館長：小田原文学館隣の県有地（旧保健福祉事務所跡地）を神奈川県から取得する際の借入に係る利子分を計上している。

野村委員：第24回図書館を使った調べる学習コンクールの地域コンクールの応募作品のうち、小田原市の応募作品はどれくらいあったのか。また、昨年度と比べてどれくらいの増減となっているのか。

古矢館長：小田原市の応募作品数は14作品である。地域コンクールは小田原市が開催したもので、神奈川県内では3自治体が開催しており、自治体経由で全国大会に応募している。地域コンクールを開催していない自治体の方は全国コンクールに直接応募する仕組みになっている。学校を中心に働きかけを行っており、例年、夏休みに講座を開催しているが、今年度はコロナ禍で学校への事前の説明会ができなかったこと、また、夏休みの期間が短く、課題が多数ある中で、取り組みにくい状況もあり、応募作品数が減少したと思われる。

野口委員長：小田原市のコンクールで市長賞、教育長賞を受賞された2作品が全国コンクールで佳作を受賞したということである。応募作品が限定されている中でも、大変良い作品が全国コンクールで賞を受賞したということは素晴らしいことだと思う。今年はコロナの状況が収束し、ぜひ多くの方に応募していただけると良いと思う。

（3）図書館の運営体制等について

ア 令和3年度中央図書館の運営等について【資料3】

○事務局説明（資料に基づき服部係長より説明）

○質疑応答

倉澤委員：地域資料コーナーの開設について、小中学校の社会科や総合的な学習の時間で地域学習を進めているので、子どもが郷土資料を求めて図書館に行った時に、地域資料コーナーが開設されていると大変有難い。

事務局：小中学生向けの郷土資料は1階の児童書のコーナーにあるが、地域資料コーナーの選任の職員が対応することもできる。

古矢館長：お子さんには、ぜひ地域資料に興味を持っていただきたい。まず、カウンターでお声かけいただき、必要な資料を提供できる体制を整えたい。併せて、新聞のデータベースの活用も学校の先生はもちろん、お子さんも積極的にご活用いただき、古い出来事を調べる体験をしていただけるよう、今まで以上に学校連携を密にして、お子さんの学習に役立てていただけるようになっていくと考えている。

武田委員：地域資料について、小田原駅東口図書館でも期間やテーマを設定して開催するような企画はあるか。

事務局：小田原駅東口図書館でも旧市立図書館から移管した郷土に係る図書を所蔵している。資料を利用したイベントを小田原駅東口図書館の企画として考えられる。

古矢館長：代替できないような貴重な資料については、中央図書館で護りながら活用していく。小田原駅東口図書館では、展示をしながら貸出の案内をするコーナーがある。積極的に小田原ゆかりの作家の作品や北条氏に関する作品、小田原生まれの童謡に関する作品をご紹介いただいている。

イ 小田原駅東口図書館の運営状況について【資料4】

○事務局説明（資料に基づき内田副館長より説明）

○質疑応答

武田委員：利用者の年齢層など傾向を教えてください。

事務局：年齢層については、駅に近いため、学校帰りの学生の利用が多い。また、児童コーナー「本の森」に工夫を凝らしているので、隣接のおだび子育て支援センターを利用しているお母さま方に大変好評をいただいております、子育て世代の方の利用が増えている状況である。

北河委員：講座「としょかんお楽しみぶくろ」の企画は、すごくワクワクするような感じを受けるが、評判はどうだったか。

事務局：大変好評で、当初予定していた袋数では足りず、一般向けの「お楽しみぶくろ」を追加したが、すぐになくなってしまい、開催期間を繰り上げた。

事務局：中央図書館についても、小田原駅東口図書館同様、大変好評であった。

事務局：こちらの事業は、何年も前から好評で続けている事業なので、今後も続けていきたいと考えている。

北河委員：何年も前から継続している事業だと知らなかったが、今度ぜひ参加したい。

野口委員長：12月20日（日）のXmasイベントの読み聞かせで、協力が小田原鉄道歴史研究会になっているが、これは鉄道の絵本の読み聞かせをされたのか。

事務局：鉄道絵本「デゴニものがたり」の読み聞かせを行った。

古矢館長：昨年は小田原駅開業100年節目の年ということもあり、鉄道関係のイベントを多く開催していただいた。小田原駅に見える図書館としても非常に特色あるイベントが展開できたと思っている。今後も周年記念などタイミングを捉えて小田原に相応しい企画を考えていただけるものと楽しみにしている。

野口委員長：私も12月4日（金）の小田原鉄道歴史研究会トークイベントで講演する機会をいただいた。

大塚副委員長：小田原駅東口図書館のマスコットキャラクターをもっと利用すれば良いと思うが、いかがか。

古矢館長：小田原駅東口図書館のオリジナルキャラクターとして北原白秋の童話にちなんで、赤い鳥・青い鳥・白い鳥をデザインしていただいた。館内表示やイベント開催案内、開館記念イベントで配布したトートバックなどにも使用している。じわりじわりといろいろなところで活用しているので、親しまれていくと良いと思っている。

大塚副委員長：小田原駅東口図書館を利用する70代の方から、開架の冊数が少ない印象だと伺った。また、ホームページで上手く検索できない、という感想も伺ったが、実態はどうか。

古矢館長：新しい図書館で、図書の貸出冊数が多いということも理由の一つと考えている。また、全ての書架に隙間なく排架されていると、新規購入図書の入る余地が無くなるので、開館当初の所蔵冊数は収蔵可能冊数の7割に設定した。小田原駅東口図書館に所蔵の無い図書でも、予約取り寄せすることができるが、指定管理者には、新規図書の購入にも努力していただけるものと考えている。

事務局：小田原駅東口図書館独自のホームページを作成しており、開館当初は検索をかけても上位にヒットしなかったが、現在は検索キーワードで「小田原駅東口図書館」と入れていただければ、すぐに検索できる。また、小田原市ホームページからも小田原駅東口図書館のホームページに繋がるリンクを貼っているので、ご利用いただきたい。図書については、新しく、需要の多い図書を揃えているので、借りる方が多く、回転率が良い状況である。6万冊収蔵可能であるが、開館当初の蔵書は、7割程度の約4万3千冊をそろえた。今後、指定管理者である有隣堂が購入して蔵書を増やしていくことになるので、ご理解いただきたい。

3 協議事項

(1) 子ども読書活動の推進等について【資料5】

○事務局説明（資料に基づき野村副館長より説明）

○質疑応答

石井委員：子どもの読書を推進するため、本にあまり接したことがない子どもに「読書って面白いよ」とどのように働きかけていくかが課題と考える。地理的な課題、例えば、子どもが本に興味を持っていたとしても、図書館から遠い地区に住んでいると、子どもだけで行くのは難しい。図書館に行こうと思った時に、結局、保護者に「図書館に連れて行ってほしい」と伝えないと、距離的に行くことができないのではないかとと思う。図書館という場所に子どもを向かわせるためには、結局は親の意識とか、親が子どもに与える環境など、そういうところを親が整えてあげないと、子どもの読書活動を学校以外で推進するのは難しいのではないかという印象である。この問題の解決が、推進のためのポイントになるのではないかと考える。

古矢館長：子どもが保護者の考えにより左右されない状態が一番良いとは思いますが、現実的には保護者の力というのは非常に大きい。家庭における子ども読書活動の推進というのが方策の筆頭に上がっているが、計画の際、子どもの行動につなげるものではあるが、保護者に向けて、本を読む子に育つと、これだけ良いことがあるというところもアピールしていきたい、特に、読解力は子どもの学力に直結しているともいわれるので、そういう点を訴えるため、子どもの成長に読書が欠かせないということを最初に謳っている。図書館に来なければ読書活動の推進ができないとは思っていないのだが、年に何度かは図書館に来るのがすごく楽しみとか、図書館でこれだけたくさんの本が並んでいて、自分の好きな本が選べるなど、学校図書館や小さな本屋さんだけではなく、図書館に足を運んでもらうということも、とても大切なことだと思うので、そういった環境にお子さんを連れ出していただけるよう、保護者にメリットを伝えていきたいと考えている。

事務局：第二次小田原市子ども読書活動推進計画の中で、乳幼児のいる家庭での読書の状況を調べた結果がある。読み聞かせをしない保護者の割合は、平成19年度が14%、平成27年度が21.3%と増えている。第二次小田原市子ども読書活動推進計画ではこういった逆境ともいえるような状況に対し様々な取組をする必要があるとしている。小田原駅東口図書館の利用者は旧市立図書館と全く違う。比べものにならないような利用者層の激変がある。そういったところに注目をしていくというのが、今後の方向性として必要ではないかと考えている。

石井委員：保護者に対するアクションも必要だと思う。子どもを取り巻く社会環境の1つとして、現在、様々なSNSが展開され、活字離れも指摘されている。SNSもツール

の一つではあるが、図書などの活字から得られるものにも楽しさや素晴らしさがあるというところを具体的に発信してもらいたい。

野口委員長：図書館では読書推進のための講演会を開催していると思うが、保護者への働きかけも意図というか、主眼にあるか。

古矢館長：お子さんが直接来るというよりは、保護者の方にお越しいただきたいと考えて開催している。講演会は年に1回程度の開催だが、今後、小田原市全体として家庭教育に力を入れていく考えがある。家庭教育の進め方を見直していくタイミングもあるので、その一環として、読書の推進ができないかと考えているところである。

馬見塚委員：学校との連携に関して、団体利用率をあげていくという説明があったが、これはどういうことか。

野村副館長：数値目標のところに、団体登録率という指標がある。目標としては、幼稚園・保育所が60%、小中学校が100%である。この目標については、実績はかなり目標値に近い数値である。連携の指標としては、団体登録率が該当すると考えている。

古矢館長：個人への貸出だけではなく、団体としてもっと多くの冊数を、長期間貸し出す「団体貸出」という制度がある。学校図書室だけでは足りない場合や、新鮮な図書を児童・生徒に提供するため、例えば学級文庫で使っていただくなど、積極的な利用をお願いしたいと考えている。

馬見塚委員：第二次小田原市子ども読書活動推進計画で、読解力・表現力・共感力を育てる目標として示されているが、これを実践していくためには、冊数を読むことを大切にしている印象を受ける。冊数も大事だが、これを追及しすぎると、学校などでもあるのだが、読書カード・がんばりカードなどを発行して、それが全部埋まるとシールが貼られたり、賞状を授与するなどの取り組みをする。しかし、そうすると借りることが目的となってしまう、数だけを追求するような状況も生まれかねないと懸念している。多く読むことも大切だが、それが共感力・読解力を得られるかというのは疑問という面もある。1冊の本をじっくりと深く読む、本の主題に迫るという読書の仕方大切であると思う。行政として数を追いたいという気持ちは理解できるが、あまり数値にこだわらなくても良いのではかとも思う。

野村副館長：数値を追求しているよう、誤解を与えていたら申し訳ない。第二次小田原市子ども読書活動推進計画で子どもの成長を目標にしたのは、まさに子どもの内面をきっちり見ていこうというもので、数値で測れないものも当然あると考えている。来年度、小・中学校を対象にアンケート調査を予定している。馬見塚委員のご指摘にあった点をどのように測定するのか、アンケートの質問の作り方によるものと思っており、難しさを感じている。皆さまのご意見をいただいた上で、アンケート調査についても知恵をお貸しいただきたい。

馬見塚委員：数値に表れない、感想などの声も大事だと思う。また、幼児教育の現場でも読み聞かせについて数値を取っているが、これは絵本の読み聞かせに限定されているのか。幼児教育の現場では「おはなし」のウエイトが高い。昔話などを「読み聞かせ」ではなく「語り聞かせる」ことは、最近では家庭でも少なくなっているが、情操を育む上で、とても大切である。そういったことも計画推進の中で位置づけていただけたらと思う。

大塚副委員長：図書館と学校との連携についてだが、小学校の司書や図書担当の先生、また、こういうテーマで本を探したいという先生たちから、図書館側に相談窓口的なものがあったらいいと言われて久しい。図書館も他の業務がたくさんある中で、選任というのは難しいかもしれないが、他の業務の兼任でもいいので、学校関係の事業、図書活動にこういった資料やこういう本がありますか、というような相談に乗ってくれる図書館スタッフを指定していただければ有難いと思う。もう1点、保護者が図書館に来るために、本が子どもにとって大事、あるいは、ご自身にとっても大切だと思ってもらえるきっかけとして、久野小学校の例を上げると、小学校就学前の年長さんが学校に来ていただく機会に、体育館で待つ間「大型絵本の読み聞かせ」をしており、子どもたちに読み聞かせの楽しさを味わってもらっている。また、保護者には入学時の学年集会で、図書ボランティアが絵本の読み聞かせをさせていただくことによって、ご家庭に帰って、こんな風にやればいいんだというのを体験していただいている。本の内容を通じ、子どもと安心感を得る時間を作るきっかけとして、また、子どもたちには、本に興味を持ってもらえるよう、保護者にご協力いただければ良いと思う。

野口委員長：大塚副委員長発言の、最初の点について、自治体では「学校図書館支援担当」や、「学校図書館支援センター」といった、市の図書館にそういう部署を設けているケースもある。センターなど大掛かりではなくても、担当の方が明確になっていて、その方が基本的に相談に乗りますよ、ということをお伝えいただくだけでも違うように思う。職員の負担がない範囲で、何かそういう形が取れば、ご検討いただくのも一案かと思う。

野村委員：例えば自分の地元のことを本で調べようと思った時に、住んでいる場所から図書館が遠いのですぐに行けないということもある。まずは携帯端末やタブレットで調べるといふ時、例えば「小田原城」を検索する場合に、子ども向けのホームページがそもそもない。コロナの状況が今後どうなるかわからない、まだまだ収まる気配はないため、そうなった時に図書館をどう使ってもらおうか考えた時に、時間制限もある中で、サイトをもっと有効活用できた方がよい。もちろん小田原駅東口図書館のサイトが新しく出来て、とても素晴らしくなったとは思いますが、子ども向けに特化し

たようなページや、本の紹介ページがあったりするの也不错かなと思った。小田原駅東口図書館の開館時、タウンニュースに、有隣堂の取材記事で、ビブリオバトルを構想している、との記載があったと思うが、そういったことをオンラインで実施しようと考えた時、大人向けとか学校の司書さん向けとか、図書館が情報を提供したいような、例えば Zoom を使った講演ややりとりを実施することも想定される。元々、図書館に来る子どもや大人は働きかけなくても来てくださるため、新規利用者をどう誘導するか考えると、いろいろなアクセス方法があった方が良くと思う。そのため、サイトを作る際、予算の都合もあると思うが、そうしたことが新たにできる仕組みがあると良いと感じた。

古矢館長：小田原市として、デジタル化に関する施策を進めている最中であり、まだ内部の環境が整っていない。積極的なアイデア等について、求められているところである。図書館においても、例えば今年、子ども読書活動推進講演会がコロナ禍で開催できないので、代わりに「語り」や「読み聞かせ」の動画撮影をお願いしており、3月上旬に公開できる見込みである。野村委員のご発言にあったオンラインでのサービスをきっかけに、読書の楽しさを知っていただけるよう、取り組んでいきたいと考えている。図書館でデジタルを活用した読書活動の推進に資するアイデアがありましたら、ぜひ委員の皆様からのご提案をお願いしたい。

倉澤委員：図書ボランティアのご協力により、学校の本を読み聞かせに活用する機会ができ、また、学校司書も週2日配置されているので、図書室の環境も充実してきている。小・中学校は読書の時間も確保しているので、そういったことで、これまでの取組について、一定の評価はされると思うのが、保護者・大人の読書にも繋げていく意味では、保護者の方も巻き込んで進めていくという点が、第二次小田原市子ども読書活動推進計画の中でも取組の一つとして示されていたので、学校の方もこの取組について、小・中学校をあげて学校協議会として取り組んでいく必要があると考えている。SNSの関係も課題にはなっているがICTの活用も学校としては力を入れており、豊かな心を育てるということと、両面で取り組んでいかなければいけないと、考えている。

野口委員長：このテーマは今後も定期的に協議事項ということであがることになると思うので皆様のご意見を伺う機会はあるかと思うのでよろしくお願いします。

私から2点ほど。今後の検討課題というところであげていただいている中に含まれる話かなと思うのだが、以前、国の第四次「子供の読書活動の推進に関する基本的な計画」の検討に関わらせていただいた際、かなり議論のテーマになったのが、「読書をどうとらえるか」。ICTの活用も学校現場に求められつつあるし、地域でも電子書籍、電子図書館の導入なども進んでいる中、ICTを活用した読書は読書に入る

のか、そういった議論もあった。意外と入るといった意見があれば、入らないという意見もあり、実は曖昧である。そもそも法律にもそんな記載はない。そういった議論の中、第四次計画から、電子書籍などの情報通信技術を活用した読書も含むと注記されることとなった。そういったデジタルも融合させた形で読書をとらえ直していくということも、想定されている対象は中学・高校生なのだが、その年齢層には必要な視点かもしれない、ということもあるので、もしかしたら、そういった検討や、皆様のご意見などを伺う機会があっても良いと思う。もう1点は「社会情勢の変化への対応」といった文脈の中で、やはり議論になったのが、全ての子どもに読書活動を推進しようといっても、どうしても対応が弱くなりがちなのが、障がいのある子たちと、言語的なマイノリティの子たちに対する対応であり、そういった視点というのも、明確に打ち出していくということも大切かと思う。読書バリアフリー法が2019年に策定されたが、あの法律は公共図書館も学校図書館も対象の法律になっているので、そういった視点も上手く次の検討の中で落とし込んでいけるといいと思う。

古矢館長：今後議論を重ね、計画策定以前に、何が子どもの読書なのかとか、そういうところから自由闊達な意見交換をした上で、目指すところへの共通認識のもと、計画策定に取り組んでいきたいと考えている。よろしくをお願いしたい。

4 その他

○事務局説明（穂坂主査）

- ・ 次回の協議会は5月頃開催予定
- ・ Zoom 会議の感想等をいただきたい
- ・ 星崎定五郎像のレプリカ紹介
- ・ 後日、本日の議事録の確認をお願いする